終助詞の研究　――「っけ」の機能――

又 平 恵 美 子

キーワード：「っけ」、イントネーション、記憶内情報の検索、終助詞の相互承接、発話

要　旨

現代日本語の終助詞「っけ」について、その意味「話し手の発話時点での記憶内情報の検索結果の提示」ということから内部分類を行う。まず、発話者が検索結果に対し、確定的・未確定的のいずれの相であるか、ということによって分かれ、さらに伝達行為のタイプからそれぞれ二つのタイプに下位分類される。また「っけ」と他の終助詞（かな・な）を置換して類意表現をあらわす場合や、「っけ」に他の終助詞（か・よ・ね）が後接する場合、双方の終助詞が持つ意味と、イントネーションの型とが関連して、置換・後接の可否が対応することを示した。また他のモダリティ形式の中で、意味上の特徴や「よね」との共起制限や「の」を境とする出現場所から、「っけ」は「か」「だろう」と同じ一つのグループに属することを述べた。

0．はじめに

現代日本語の終助詞「っけ」については、管見の限りまとまった研究がない。*1
本稿はこの「っけ」についての統一した意味の規定をすることと、後接する他の終助詞との関連について考察することをねらいとする。*2

なお、「外、雨、降ってっけ？」のような、茨城県など各地で話される「かい」「かえ」の方言形は、今回は扱わない。

1．「っけ」の基本的意味

まず、テレビで相撲を見ている人が、ひとりごとで

(1)結びの一番はどっちが勝つんだっけ

といった場合について考えてみる。この発話が不適切とならない場面を想定してみると、

①実際にはすでに取り組みがすんでおり、その結果を見るか聞くかしたことがある。発話時は録画の放送で見ている。

②生中継であっても、どちらかを勝たせる八百長であることを事前に知っている。

のような場合であると考えられる。

また(1)に対して、その情報を持つ者が

(2)大関が勝つんじゃなかったっけ

ということもあり、これは会話を適切に成立させる。*3　あるいは

(3)この関取も昔はいい勝負をしたっけね

というように昔のことを思いおこして、しみじみとするということもある。

(1)～(3)に共通することがらは、「っけ」を用いる時には、発話者の記憶内にある情報を思い起こして考えて発話している、という点である。

このように「っけ」が使われる状況を考えてみると、「っけ」の意味は

(4)　「っけ」の意味：話し手の発話時点での記憶内情報の検索結果の提示

を表したものである、とすることができ、本稿はこの見方に立って詳細な内部分類を行なう。

2.「っけ」の用法

終助詞「っけ」は通常話しことばでのみ用いられる。記憶内情報の検索を行う上で、検索を開始したが、その結果まだ情報が事実であると確定するに至っていないという型(A)と、検索結果、その情報が事実であると確定している型(B)とがある。

さらにその伝達行為のタイプから分類するならば、それぞれ2タイプに下位分類することができる。

A. 未確定型

A1. 疑問語疑問文

(5)結びの一番はどっちが勝つんだっけ

(6)セツコさん、私は今朝何を食べましたっけ

(7)今日まーくんは、ママ(自称)にどこへ連れてってもらったんだっけ

A1 タイプは、話し手の記憶内情報を検索したが、「何、どこ」など欠如した項目があるというものである。特に聞き手にむけられたものであれば、それにあてはまる「項目復帰」を要求する質問文になる。*4

A2.YesNoQ 型疑問文

(8)あなた、あの、直子さんとおっしゃいましたっけ

(9)田中さんって東京出身だっけ

YesNoQ「ーなかった」疑念型

(10)大関が勝つんじゃなかったっけ

(11)君、僕は今日中に仕上げてくれって頼まなかったっけ

A2 タイプは、A1 タイプと同様、聞き手にむけられていれば、質問文になるタイプである。A1 タイプとは異なり、検索しているものがそれで正しかったかどうかの確定ができない、というもので、質問文の場合には、相手にその確定を要求するものである。

A2 タイプでは「のじゃなかった」「なかった」形が出現できる。この形については注の３で述べた通りだが、発話の動機としてそれまで話し手の記憶の中にあった情報と、現在新たに事実として伝達された情報とに齟齬が生じた場合があるため、便宜上これを＜疑念型＞と呼ぶことにする。この否定を意味しない「(のじゃ)なかったっけ」は、「そうである蓋然性が高い、と記憶内情報の検索結果から出た」という「話し手なりの確からしさ」を示すものだと考えられる。

B. 確定型

B1. 納得

(12)そういえば今年は閏年だったっけ

(13)そうだ、先週のパーティで、ワイン、全部開けちゃったんだっけ

B2. 詠嘆

(14)その当時は僕もこんな靴、履いていたっけ

(15)お母さんがセーター編んでくれて、とっても嬉しかったっけ

Ｂタイプは記憶内情報を検索した結果、それが事実であるということがわかったものである。検索結果が確定してしまっているのだから、蓋然性を問題にしないので「(のじゃ)なかったっけ」が出現しないし、質問文にならない。つまりＡタイプのような「疑い」も「問い」もない。

B1 タイプは、発話時直前まで忘れていたことや思い出せなかったのが思いだせたもの、B2 タイプは発話時現在とは切り離された、過去の中で完結したこととなってしまっているものである。また、B1 タイプは「そういえば」「そうだ」のようなことばがなかったり、発話の場面設定がなかったりすると、A2 タイプと字面の上で区別することができない。

B2 タイプは「嬉しかった」「～したかった」など、話し手の当時の感情や欲求を表す語が出現できる。また「のだっけ」は出現しない。「のだっけ」が出現できる B1 タイプと、B2 タイプの大きな違いは、発話の動機である。B1 は発話時以前に何らかの疑わしさがあったことがきっかけとなり、記憶内情報を検索し、その結果、その疑わしさが晴れるような確定した情報を得る、というものである。一方、B2 タイプはそういった自問するような、動機がない。田野村(1990)では「のだ」の意味を「あることがらの背後の事情を表す」としている。検索方法が「背後の事情」との照会をとらない B2 タイプには「のだっけ」が不可になる、と考えられるのではないだろうか。

３．類意表現　「～したかな」「～したな」

「っけ」は、Aタイプの(16)(17)は「～したかな」の「かな」、Bタイプの(18)(19)は「～したな」の「な」とタイプによって異なる形式で互換性がある。つまり「な」自体の意味と働きにも検索的要素があると考えられる。

(16)[A1]結びの一番はどっちが勝つんだったかなぁ

(17)[A2]田中さんって東京出身だったかなぁ

(18)[B1]そういえば今年は閏年だったな

(19)[B2]お母さんがセーター編んでくれて、とっても嬉しかったな

しかし、「っけ」を「かな」「な」と置換することは常に可能であるが、その逆は必ずしも成立しない。例えばAタイプでは、順当に行けば今頃そのようになっているはずだ、という推量でも「かな」が出現できる(20)に対し、(21)では出現できない。

(20)お父さんたち、そろそろ名古屋についたかな

(21)＊お父さんたち、そろそろ名古屋についたっけ

また、Bタイプでは発話時直前に終了したことについても(22)のように「な」は出現するが、(23)の場合、この「走ったこと」が記憶内情報として入っていないものなので「っけ」は出現しない。

(22)ああ、さすがにしんどい。よく走ったなぁ

(23)＊ああ、さすがにしんどい。よく走ったっけ

結局「っけ」は(4)で述べたように、その使用が「記憶内情報の検索」に限られるのに対し、「～したかな」「～したな」はそれに限られないということである。

4.「っけ」と他の終助詞との相互承接

4．1「っけか」

「か」の意味については、益岡(1992)では「不定性をあらわすもの」として規定されている。本稿の3.では、Aタイプは「かな」とBタイプは「な」と互換性がある、という指摘をした。Aタイプは<不定部分があること>を表明しているものであり、Bタイプは<不定部分が晴れた>(B1)、あるいは<不定部分がそもそもない>(B2)ことを表明しているものであり、このようにABの違いが「か」の出現の可否と一致する。

ただし、「っけ」に後接する「か」については、この現象とは異なる。

多分に方言的ではあるが、「っけ」に後接して「っけか」と用いることができる。方言的だと考えられる理由は、同じ発話場面で「っけか」といえるものは「っけ」でも変わらないようであることと、丁寧体にそぐわないこと(??「しましたっけか」)からである。

「っけ」に不定性をあらわす「か」の後接については、

(24)[A1]結びの一番はどっちが勝つんだっけか

(25)[A2]田中さんって東京出身だったっけか

(26) [B1]そういえば今年は閏年だったっけか

(27) [B2]＊お母さんがセーター編んでくれて、とっても嬉しかったっけか

このように A1,A2.B1 タイプに後接可能であり、B2 タイプには「か」は後接できない。

B2 は偶発的に思い出されたことを言っているだけで、敢えて情報を検索せねばならない、という状況に自分を追い込んでいるわけではない。

情報を検索させるのは不定な部分があったからであり、B1 は＜不定部分が晴れた＞ものの発話以前に、不定部分が存在していたことがあるわけである。

だから発話するまでに、不定部分が存在しない B2 には、「か」が後接しない。

この B2 にのみあらわれる特殊性は、本稿の2. でも指摘した、B2 のみ「のだっけ」が出現不可である、という問題もある。

「か」後接不可の問題と、この「のだっけ」の出現不可の問題とは、＜何らかの不定の部分がない＞、即ち、＜疑わしさがないから照会しない＞という意味で共通していると考えられる。

4．2「っけよ」

「よ」についての考察は、金水(1993)白川(1992)井上(1993)などがある。総合すると、意味論的意味としては「状況にとって関与的である」というもので、談話の中では、聞き手に向けたものであることをことさらに示す機能を持ち、その発話の動機としては話し手の意図と矛盾する行為を相手がとった或いはとろうとしている、というものになる。

広く一般的に用いられているわけではないが、「よ」が「っけ」に後接している発話を耳にすることがある。ただし、使用される状況は、純粋な質問文というよりも、相手の弁が納得できないような内容のものであるため、それに抗議する、というような反語的な場合に限られるようである。

(28) 誰がそんなこと言ったっけよ。

(29) おまえが金貸してくれたことなんかあったっけよ。

したがって、聞き手めあて性がないBタイプには、「っけよ」がいえない。

また、この「よ」のイントネーションの型は「ちょっと何するのよ」と同じ下降「↳」イントネーションで、「もしもし何か落としましたよ」のような上昇「⤴」イントネーションは現れない。

文末形式で、後接する「よ」が「よ↳」に限られるものは、他には

(30) どうせ当日になりゃ、ヤツだって何とかするだろうよ↳

(31) 俺の方が悪いっていうのかよ↳

のように「だろう」と「か」がある。いずれも純粋な質問にはならず、相手の意見をねじふせようとするようなニュアンスがある。

他の文末形式では、「らしい」「みたいだ」「そうだ」「かもしれない」などは「よ⤴」の

みで、「はずだ」「に違いない」は「よ⤴・よ↳」ともに後接可能である。

つまり「よ⤴」のみの形式は、第三者の意見を紹介する形で相手を諭すような場合であるため、相手をねじふせるようなニュアンスを持たない、ということになりそうである。

4．3「っけね」「っけな」

「ね」は、あらゆる文末形式に後接可能である。「ね」の意味については、金水(1993)は「当該の発話をマッチする文脈にリンクせよ」であると言っている。これは言い換えると「第一発話者でも第二発話者でも「発話に対し、情報が等価であるものを探して発話せよ」という意味を持つ」ということであると思われる。

「な」については「等価な情報を探す」という点では「ね」と同じであろう。しかし「な」は、ひとりごとでもいえるため、相手の発話を考慮するかどうかはあまり中心的な問題ではない。むしろ「なぁ⋂(※長音化し急速な下降をするイントネーション)」といわない限りひとりごとである。要するに、聞き手めあて性が「ね」より低い、ということになる。また、ひとりごとではない「なぁ⋂」は、わりと男性的で、特に丁寧体にすると使用者は年輩の男性に限られるようである。

(32)あのころはよく一緒に数寄屋橋あたりで飲みましたっけなぁ。

「ね」「な」のイントネーションについては、話し手が一通りその証拠をつかんでいて、聞き手に「そうだ」と言わせることが目的の、本稿でいう A2 タイプのうち裏書き要求をする質問(32)と、ある質問に対して、返答するまでに計算を要するようなもの(33)b とではイントネーションの型が違う。

(33)田中さんですね⤴

(34)a: おうちをでて一人暮らしなさって何年になりますか

b: ええと、８年ですね⤷(※上昇イントネーションというものでもなく「ね」に軽く高平調のアクセントがあるという程度のもの)

また質問ではない(34)(35)では、⤴にならず、⤷か、あるいはそれが事態が驚くべきことであった場合には(36)のように長音化して⋂になる。

(35)いや、違うね⤷

(36)静かな夜だね⤷

(37)きれいな海だねぇ⋂

「っけね」「っけな」の場合、話し手の記憶内情報なので、聞き手に裏書きとして通用するものではないため、⤴がなく、Aタイプには⋂がBタイプには⤷と⋂が出現する*5。

Aタイプで⋂が出現することについて考える。この(38)は発話者が聞き手も同じ思いであるという見込みを持っている。そして同意以外の返答は期待していない。

だから A1 タイプで

(38)あの時のイベントには誰が来たっけねぇ⋂

という発話者は、聞き手も自分と同様に誰が来たのか忘れている状態で、この「誰」にあてはまる人物名を聞き手が即答できないと考えている。つまり検索しなくてはならないような情報である、ということについて同意を求めているともいえる。もちろん聞き手にそのゼロの状態から頑張って一緒に思い出し項目復帰を手伝ってもらいたいという気持ちがある場合もある。

「っけね」はA1 A2 B1 B2のいずれのタイプにも出現する。

(39)[A1]結びの一番はどっちが勝つんだっけね

(40)[A2]田中さんって東京出身だったっけね

(41)[B1]そういえば今年は閏年だったっけね

(42)[B2]お母さんがセーター編んでくれて、とっても嬉しかったっけね

いずれにしても積極的な質問として「っけねぇ」が用いられることはないと思われる。

5.「っけ」「か」「だろう」の群

5．1「＊っけよね」

「よね」の意味については金水(1993)、用法については蓮沼(1995)などがあるが、談話で「話し手と聞き手とに共通認識を作成したり、共通認識がすでにあることを確認したりする」というはたらきをするものである。

「＊っけよね」という結びつきはない。「よね」という一つの形式として捉えるならば、「＊っけよね」が不適格であるのは、話し手自身の記憶内情報の検索結果を共通認識として確認することができないから、ということができるわけである。

しかし、「よね」を一つの形式ではなく、「よ」に「ね」がくっついたを二つの形式として考えるならば、「っけよ↳」「っけね」が可能であるのに「＊っけよね」は不適格であるということに、説明がつかない。

同様に「だろう」も「だろうよ↳」「だろうね」が可能で「＊だろうよね」が不適格であり、「か」も「かよ↳」「かね」が可能で「＊かよね」が不適格である。

以上の問題をまとめると、「よ」自体にも「ね」自体にも「っけ」「か」「だろう」と共起できない理由がないので、「よね」そのものに共起制限がある、と考えた方がよいことになる。つまり、意味論上「よね」という形式自体がもともと「よ」「ね」の二つの終助詞から成り立ったものだと考えることについては否定しないにしても、運用上は「よね」は一つの終助詞として意味・機能・共起制限を持つものだという捉え方をするべきではないか、ということである。[＊6]

「っけ」は記憶内情報の検索、「か」は不定性をもつもの、「だろう」は断定保留、というそれぞれの基本的意味を持つが、共通していえることは、＜話し手の知識や認識が絶対基準である＞ということである。このような基準のものについて、聞き手と共通認識を確

認することはできない。これらに対して、他のモダリティ形式では、「らしい」「みたいだ」「そうだ」「はずだ」「に違いない」「かもしれない」など、いずれも「よね」が後接可能である。これらの形式は、情報の把握の仕方や入手ルートについて明示するものだから、その情報は、話し手自身にはいわば著作権がないものである。そういうものが話し手にないものについては、共通認識の確認ができる。しかし、話し手に知的所有権のある情報であることを示す「っけ」「か」「だろう」では共通認識の確認はできない。

以上の意味上の特徴と「よね」という終助詞との共起制限からみて、「っけ」「か」「だろう」の三つは一つのグループに属するものと考えられる。

5．2「の(だ)」＋「っけ」「か」「だろう」質問文

「か」は「かもしれない」「らしい」「みたいだ」「そうだ」「はずだ」「に違いない」に直接後接しない。

(43)＊彼女はその店で口論していたらしいか

(44)＊犯人は昨日もこの道を通ったにちがいなかったか

「っけ」も同様に、

(45)＊彼女はその店で口論していたらしかったっけ

(46)＊犯人は昨日もこの道を通ったにちがいなかったっけ

「かもしれなかったっけ」「らしかったっけ」「に違いなかったっけ」はいずれも不可である。「っけ」には、話し手の情報の把握の仕方や情報を得たルートがどうであったかという＜情報入力時の手続き的記憶＞を検索する機能はない。

ただ「のだ」がある「のだっけ」質問文では、

(47)彼女はその店で口論していたらしいんだっけ

(48)犯人は昨日もこの道を通ったにちがいないんだっけ

といえる。しかしこの「らしい」「に違いない」は、聞き手自身が情報を把握するなり他から入手するなりしたものであり、「のだっけ」は話し手が、以前に聞き手から間接的に受けていたことについて、検索しているのである。

この「の」の問題は、「だろう」「か」も同様で、

「のか」質問文

(49)彼女はその店で口論していたらしいのか

(50)犯人は昨日もこの道を通ったにちがいないのか

「のだろう」質問文

(51)彼女はその店で口論していたらしいんだろう⤴

(52)犯人は昨日もこの道を通ったにちがいないんだろう⤴

これらでも同様に、「らしい」「に違いない」という情報入手や判断は聞き手に由来したものであり、話し手はそれについて問うているものである。

また「の」を境に、前にあらわれるか、後ろにあらわれるかということから、「かもしれない」「らしい」「みたいだ」「そうだ」「はずだ」「に違いない」という群と、「っけ」「だろう」「か」という群とはわかれる、ということがいえる。

更にいえば、後者の群の中でも相互承接の順位が定まっており、「っけ＋か」「だろう＋か」の組み合わせのみ可能である。したがって、この群でも「だろう」と「っけ」はその下位分類でも同じ群にある、と考えられるが、この問題については後に改めて考えたい。

6．記憶の検索

本題からは外れた周辺的な問題になるが、記憶内情報の検索結果を提示することに、対話上どういう効果があるか、ということについて少し触れておく。

「なぜ検索をしたくなるか」という話し手の動機については、Aタイプの場合、「思い出せないことが気持ち悪い」という不快な状態から脱したいため、というもので、Bタイプの場合、「思い出せた」ということに安心するため、「思い出すことで当時の心情を追体験する」というものだったりする。

しかし対話の場合は、「対話を成立させる」という目的があるため、これらの動機に加えて「対話を成立させるために検索をする」ということがある。

(53) a: そしたら偶然、前のアパートで隣の棟だった…何ていう名前だったっけ。
　　b: ああ、あの人ね。彼女に会ったの？

このように、お互いに同定できるものが浮かびさえすれば、話の展開には支障をきたさないこともある。つまり、もともと聞き手にわかりやすくするためだけに行っている欠如項目の復帰要求は、名称の復帰までは端折ってしまうこともある。

記憶の検索が必要な時に用いられる語は「っけ」の他にも、

(54) a: あいつだよ、あいつ。背の高い、いつも帽子被ってる…
　　b: ああ、田島くん？

(55) a: ほら、あのー、みんなで何年か前に登ったあの山…
　　b: ああ、ええと、んと、駒ヶ岳？

など「あいつ」などコソアのうちア系の指示代名詞、「ほら」や「あのー」「ええと」などのフィラーがある。もっとも「ほら」は独り言ではあまり用いられないことからもわかるように、相手に注意を喚起するためのものである。「ほら」に話し手の記憶内情報を補充させるための機能があるわけではない。定延・田窪(1995)では「あのー」「ええと」について、現物のイメージとその名前との関係から考察している。

また、記憶内情報を検索したいが、どうしても該当する情報がでてこない場合がある。

(56) a: 先日はどうも。
　　b: ごめんなさい。どなたでしたっけ。

というｂのような「っけ」でいうことがある。

これは自分に対して好意的に向かってきている人に対して「全く知らない」というのは失礼にあたるので、せめて「憶えていない」という状態であることを表した方が、多少ではあるが、失礼さを軽減できるということがあるからである。

7．おわりに

以上をまとめると、終助詞「っけ」について、その意味を＜話し手の発話時点でも記憶内情報の検索結果の提示を表すもの＞として、使用される状況から、

A. 未確定型

A1 疑問語疑問文…質問の場合は、項目復帰要求をするもの。

A2 YesNoQ 型疑問文…質問の場合は、確定を要求するもの。

なお A2 にのみ「～ナカッタッケ」という疑念型がある。

B. 確定型　「そういえば」「そうだ」等のことばが伴うことができる

B1 納得

B2 詠嘆…感情や欲求をあらわす語が出現できる。

と分類できる。そしてこれらのタイプ別に以下のことが言える。

・終助詞の置換から以下の対応関係が認められる。これはＡＢの大分類に対応する。

	A1	A2	B1	B2
っけ→かな	○	○	＊	＊
っけ→な	＊	＊	○	○

・「っけ」と終助詞との後接は、以下のようである。

	A1	A2	B1	B2	
っけか	○	○	○	＊	一度も疑いを持たない B2 は不可
っけよ	○	○	＊	＊	反語的なものにのみ○である
っけね	○	○	○	○	
っけよね	＊	＊	＊	＊	意味上、後接し得ない

・また、「っけか」といえないものと「～のだっけ」という形式がないものである B2 には関連した理由がある。

	A1	A2	B1	B2	
～のだっけ	○	○	○	＊	疑いを持たないので照会をしない

・終助詞の相互承接とイントネーションの関係から、運用上「よね」を一つの終助詞であると認定する。
そして「っけ」は「だろう」「か」と同様に「よね」が後接できない。
・「っけ」は「だろう」「か」と同様に「の(だ)」質問文では「の」よりあとに出現する。
・この「よね」と「の(だ)」質問文との対応関係から「っけ」は、「らしい」「みたいだ」「そうだ」「に違いない」「はずだ」「かもしれない」の群ではなく、「か」「だろう」と同じ群である。

ということがいえる。

注

*1『日本国語大辞典』(小学館)には、「け(終助):回想したり確認する意を表わす。親しい間柄の会話だけに用いられる。江戸後期以後の語。①過去の事柄を思い起こして確かにそうだったと確認していう。②相手の関心に訴えるように質問するときにいう」「たっけ:過去の事柄を詠嘆的に回想する話しことば」「だっけ:事柄を過去のこととして詠嘆的に回想することば」とある。また『新明解国語辞典』(三省堂)では「っけ(終助)①忘れていたことを何かの拍子に思い出してなつかしがる未練の気持ちを表わす。②忘れていたことや不確かなことを相手に質問したり確かめたりすることを表わす。①②とも親しい間柄におけるぞんざいな表現として用いられる。」とある。これ以外の辞典類の記述も上記の二つに似通っている。

*2 形態論の問題としては、以下の現象の指摘にとどめておく。「っけ」に前接するものとしては、「タっけ・ダっけ・ダッタっけ」があり、「ルっけ」は、出現しにくいと思われる。ただし実際の発話においては「犬ってカエル食べるっけ」のようなものが出現することがあり、習慣的なものについては、出現しやすいように思われる。丁寧体にした場合「デシタっけ・マシタっけ」はあるが「デスっけ・マスっけ」は「ルっけ」以上に出現しにくい。「ダっけ・ダッタっけ」については、例えば「君ニンジン嫌いだったんだったっけ」となるとかなり冗長であるという問題はあるが、この場合、意味的には「ダ」と「ダッタ」に差異は見られない。

*3 「じゃなかったっけ」だけではなく、むしろ「じゃない」と「のだ」の問題でもあるのだが

(Ⅰ)A: コロンブスは1492年にやっとインドにたどりついたんだよ
B: えっ、コロンブスがたどりついたのはインド(だ/なんだ)っけ
C: 違うと思う。コロンブスがたどりついたのはアメリカじゃなかった(/＊んだ)っけ

(Ⅱ)A: コロンブスはアメリカにたどりつくことはできなかった
D: えっ、コロンブスはアメリカにたどりつけなかった(/んだ)っけ
E: えっ、コロンブスがたどりついたのはアメリカじゃなかった(/んだ)っけ

というようにAの発話をそのまま受けるＢＤＥは「んだ／のだ」がつくことができ、疑念型(次頁参照)であるＣにはできない。ＣとＥの違いはＥは「な」にアクセントがあるがＣはそうではない。「じゃないか」については田野村(1988)に詳しい。

*4 「項目復帰」とは、記憶から欠如してしまった「何、どこ、誰」に該当する項目を、新たに「教える」のではなく、思い出させ「記憶内情報に復帰させる」というものである。なお、(7)は話し手が子を実際

どこへ連れていったか憶えていないということもあるが、この場合そういうわけではなく、最終的な意図は子にその場所の名前を思い出させ、かつ覚えさせることにある。

*5「かね」に関しては橋本(1992)でいう「年輩の男性が目下の人間にある程度丁寧に言う」文体価値を持つタイプの「君、調子はどうかね」のようなものは⤴と⤷が出現する。「っけね」の場合⤴も⤷も出現しないし、そういった話し手の人物像が限定されるような文体価値を持つタイプが他にあるわけでもない。

*6 蓮沼(1995)では、注の中で轟木靖子氏の修士論文で述べられた「よ」のイントネーションと意味機能について次のように紹介している。

「行くよ⤴…新情報提示、よびかけ、うながし、注目要求」

「行くよ⤷…述べ立て、行動宣言、聞き手に対する反発」

で、「よね」は必ず「よ⤷」に「ね」がつくので

「行くよね…話し手の判断や認識に基づいた発話内容について聞き手に確認する」

蓮沼はこれを支持しているようだが、この「っけ」「か」「だろう」のように「よ⤷」しか持たない形式で、「ね」が後接しないという事実と、そして本稿の4．2で指摘したような「よ⤴」のみの「らしい」「みたいだ」「そうだ」「かもしれない」が「よね」が後接可能であることから、「よね」を「よ⤷」＋「ね」、として扱うのは不適当であると考えたい。形式ごとに意味があり、形式どうしを掛け合わせた意味があり、さらに文末全体のイントネーションの型としての意味があるのだ、と次元を分けて考えた方が妥当であると思われるが、この問題については次の機会に詳しく述べることにする。

参考文献

安達太郎(1991)「いわゆる『確認要求の疑問表現』について」日本学報 10

井島正博(1995)「疑問文の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』第 30 号

井上　優(1993)「発話における『タイミング考慮』と『矛盾考慮』－命令文・依頼文を例に－『研究報告集4』国立国語研究所

小谷津孝明・鈴木栄幸・大村賢悟(1992)「5-3 無意図的想起と行為のしわすれ現象」安西祐一郎他編『認知科学ハンドブック』共立出版

神尾昭雄(1990)『情報のなわばり理論』大修館書店

金水　敏(1991)「伝達の発話行為と日本語の文末形式」『神戸大学文学部紀要』第 18 号

金水　敏(1993)「終助詞ヨ・ネ」『言語』Vol.22,No.4　大修館書店

定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機能－心的操作標識「ええと」「あの（一）」－」『言語研究』108

白川博之(1992)「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77 号

田窪行則(1990)「対話における聞き手領域の役割について」『認知科学の発展3』講談社

田野村忠温(1988)「否定疑問文小考」国語学 152

田野村忠温(1990)『現代日本語文法1「のだ」の意味と用法』和泉書院

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

仁田義雄・益岡隆史編(1989)『日本語のモダリティ』くろしお出版

橋本　修(1992)「終助詞複合形の意味分析」国語学会発表要旨

蓮沼昭子(1995)「対話における確認行為「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」『複文の研究(下)』くろしお出版
益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
益岡隆志(1992)「不定性のレベル」『日本語教育』77 号
南不二男(1985)「質問文の構造」『朝倉日本語新講座 4 文法と意味Ⅱ』朝倉書店
三宅知宏(1992)「派生的意味について－日本語質問文の一側面－『日本語教育』79 号
森山卓郎(1989)「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 1 』明治書院
森山卓郎(1992)「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59 号　大阪大学

付記

本稿は、1995年12月10日に「第 8 回日本語文法談話会」(於、成蹊大学) の口頭発表をもとにしたものである。発表後、多くの方々から貴重なコメントをいただいた。

特に、成稿後、渋谷勝己氏より、コメントとともに、氏の論文「文末詞ケ」(『近代語研究第 10 集』武蔵野書院より刊行予定) 及び「鶴岡方言のテンスとアスペクト」(1994) (『鶴岡方言の記述的研究』国立国語研究所) を送っていただいた。氏の研究は方言として文末詞「ケ」を考察したものであり、得るところは大変大きいが、本稿にその御教示を十分に活かせなかったのは残念である。

発表直後の議論からも筆者の内省は「多分に方言的」との指摘が特に関東以外の出身者の方々から多くよせられた。モダリティ研究に多くあることだが、語の意味は地域的に微妙に異なったニュアンスを持つものなので、渋谷氏のような方向で各方言の実態を詳細に明らかにしていくことが確かに重要である。